



雲乃晴間雙玉傳

第三集

四

^ 13
2898
14



天保五年七月長江三書

松露寺大行龍と舌戦



近世新話 雲晴間雙玉傳第三輯卷之四

播陽 宮田南北編次



第廿七回

松露寺大行龍と舌戦

再説是より嚮榎並仲之進名古小太郎の兩人へ土寇の兵と戦ひ
し小行竜不測の幻術と施しこれのそあし異女小不意小後を
襲きて十分味方の賊とあり又進今戦ふ夏も覚束あく思ひ
ふくれバ仲之進中やう不圖賊兵へ聴く不増とる大軍あく頭領行
竜異しく喚做兩名の賊ハ幻術奇方計りくく加ふる勇猛あきか
易ふ破りくかかるべし債地理と察するふ大村峠ハ山高く

又玉傳三編卷之四

て防ぐ不利あり最口惜ら思へども且く這里の敵と奪て大村峠
み引退き險阻ふよつて防ぐべし。這義やいつていふれば小太郎
雲時思案しつ登義尤理ふ當り敵と防ぐ不便多ういざや這里と
退人と猛可ふ南へ引くせむ土寇の兵も三木勢の勇猛や恐れえん
又追も來らざるやう
這段第廿五回の結下不潔なきうり且く説きしうへせう
是ふよつて三木勢ハ最易々兵と操あけ大村峠へ退きされば南方
ますく震動して今も一揆の出來るごとく近村の百姓侶老るるを
扶け幼と抱て山林に逃匿或ハ三木へ逃來るもあつて其騷動大方
あつて言末閑の夏あつたりし擾並仲之進と小太郎ハ尤右ふ分つ
て陣屋と道り賊兵這里へ出來らば打破つて奪んごとく静りえ

つて控居たり
廿六回云云雲女情と地象判解太即命に大村峠に親氣あり遊見て來よと云々這屯の夏あり 賊兵尤強
ふつて三木勢破まき引退き大村峠に居陣せしむる夏三木
へ閑えられぬ国守播磨守長則朝臣最やとかく守思ひるひ猛可ふ
大小の家臣們と評定所ふ聚めらるへ家老の面々追々集來つ
席ふよつて座しつてこれば長則朝臣ハ諸大夫に向てせむひつ加
東のよしと委しつても語りあひつたりつたり土寇の兵と退くべき
やや議しつてへ淡河彈正定範今年歳甫十八歳並とすんて
りや小可いまご君命と受ずといへども情々地腹心の者や
付加東の動情と窺ひ聽しむる賊ハ二名の頭領あり何れも
不測の奇術と施し尋常あらぬ敵とぞやせう既今四手ふ分

又三傳三載の口

是。一手の大村峠と越く。直に這里へ責來らんとせし。一手ハ川
 と南へ出て石壁の西より責上り。這里より一町ふありんとあり。
 又一手ハ雄壁ふあり。猶那地と責より。こゝ久米殿も閉ぢひ
 しあるべし。又一手ハ川傳ひ直に加古川へ打て出姫路の小寺と責
 んとあり。小可偵察する。榎並名古の兩名して大村峠と固これ
 べ賊兵より勇ありとも。這里への容易く。打越ごころ。音油断か
 らざる。石壁の西より向ひ來る。行竜が一手の兵あり。那へ歳いと
 若し。ゆりへども。神出鬼没の妙術あり。這所へ出來。遅速はさるふ
 回測る。然れども。喬樹の上川主殿と喚做る。一名の勇士
 あり。こゝ云でも。知るる。度ふ似これ。這人勇智衆ふ越る。賊

兵より勇ありとも。中々敗れし。子ま。小可猶よく。賊情と察する
 力と以て克ごころ。是より。嚮程より。既ふ計と案。出せり。
 其計い。んとあり。這三木。其の寺あり。今寺毎の沙門。金じ
 各七丈の袈裟と掛て三木城下の西手ふ出。詐て三木の城を獻
 じ。賊の頭領。降参せし。むるものあり。行竜是と積。知るとも。一
 且ハ猶豫して。進む。柏子の抜る。似る。登機ふ。味方より。
 輕騎と馳て。急ふ。伐へ。土寇の奴原。勇ありとも。いつく破るべし。
 行龍一回破。まあり。登。力と盡。足ら。諺ふ云。一陣破。て残
 黨全。是より。外。神妙の計。ある。や。諸老の御
 意見。あり。意中と盡。て。座中と見廻。演と



つらつら八年まゝ若く云あづる。智勇面ふあゝまきまら。登時
満座の諸老臣稍思案して居らる。這義充妙計ありとて
長則朝臣へ恁々と申上らるれば長則朝臣も這義に従えせ
るひ不題三木中の寺々と遣りあくるもあつらる。時ふ九月十三日の夜
月へ東の山ふ出て。世界晝より明きふ似られど寺々の和尚達箱灯
燈と燈しつれ。今日と曠と綺羅と飾り。三木の城下の西手ふ出て
土冠の來るを待居らる。そが中ふ一名の僧あり。そが名と雲古
院と喚做くら。天質英明やと古今に通じ。曾て天文ふ通達せり。
這夜国守より令命あり。土冠の大軍境と犯して。騷乱まきふ來
らん。早く來つ。賊兵と退くべきよ。命せらる。雲古院亮兵

騷も南面の椽ふ出て仰で天象と考見ふ。時今交中の頃ふして。
畢星直ふ紫微と犯し。逆流して明あり。雲古院呵々と打笈
土冠大軍やと押寄來る。今宵の内ふ退散とせ。何ぞ騷
ふ及ぶべきやと。さゝの動く氣色あり。国司の使は是非あり
して城中ふ立ち入り。と国守へ達し。これば再使とまられ
て早く來さ。催促されども。雲古院益々動ど。太白とひき
よ。泰然として酔と盡し。山の端よりひ綻び出る。月と翫
して枕ふより。飄然として。首の詩と誡と。
兒遂潢池戲弄兵
幾人賞得良宵月
蚊聲何乱醉魂清
影向禅牀静處明

如此（さ）口吟（くち）て、以後（い）もつくり、国司（くに）の使節（つか）へ大（お）小（こ）裸（はだ）れ、さか
儘（ま）ふつり、雲（う）古（こ）院（いん）へいびき、共（とも）終（つひ）ふ夜（よ）の明（あ）る（と）知（し）ら
不（ふ）題（だい）寺（てら）々の僧（そう）達（だち）へ准（のり）構（かま）となして、街（まち）郭（かく）ふ出（で）る（ら）れ（ば）、決（あ）河（が）彈（だん）正（せい）
定（さ）範（はん）へ自（みづか）君（きみ）の命（いのち）と受（う）け、二（に）千（せん）余（よ）人（にん）の精（せい）兵（へい）と引（ひ）率（りつ）し、場（ば）所（じよ）より所（ところ）り
控（ひ）てあり、案（あん）某（か）下（げ）休（き）題（だい）、這（こ）首（しゆ）ふまゝ、蛟（せう）倉（そう）紫（し）它（た）二（に）即（す）行（ぎやう）竜（りゆう）へ巽（しゆん）們（ら）と
兵（へい）と分（わ）ち、石（い）埜（の）の辺（へ）まで打（う）て出（で）東（とう）ふ向（む）つゝ進（しん）し、行（ぎやう）竜（りゆう）下（げ）知（し）しと
云（い）ふ、今（いま）這（こ）石（い）埜（の）より三（さん）木（ぼく）まで、道（みち）程（ほど）僅（わずか）一（いち）里（り）ふと、然（しか）れども
道（みち）筋（すぢ）ふ、猶（なほ）野（の）の村（むら）々（々）あり、兵（へい）ハ神（しん）速（そく）と貴（たか）むと、直（な）直（な）ふ三（さん）木（ぼく）へ打（う）入（い）
べし。三（さん）木（ぼく）の這（こ）方（かた）ふ引（ひ）續（つ）て、喬（せう）樹（じゆ）と喚（わ）做（せ）小（せう）縣（けん）あり、是（こ）們（ら）ハ心（こ）ふ
懸（か）り、足（あ）らねば、小（せう）勢（せい）と残（のこ）して討（う）つゝむべしとて、土（ど）冠（かん）寺（てら）

水（みづ）許（もと）傳（でん）
軍（ぐん）卒（そつ）と
土（ど）兵（へい）と

と激（げき）して、大（お）村（むら）小（こ）村（むら）の嫌（きら）み、打（う）潰（つぶ）し、燒（や）倒（たお）し、程（ほど）あゝ喬（せう）木（ぼく）へ近（ち）付（つ）と、
時（とき）ふ行（ぎやう）竜（りゆう）又（また）つゝ、這（こ）里（り）より三（さん）木（ぼく）へ、遠（とほ）かゝねば、兵（へい）と分（わ）て進（しん）むべし
とて、平（へい）附（ふ）本（ほん）膳（ぜん）ふ一（いち）千（せん）計（けい）の土（ど）兵（へい）と、喬（せう）樹（じゆ）の縣（けん）裡（り）と討（う）潰（つぶ）し、又（また）
坪（つ）蟻（あ）平（へい）内（ない）一（いち）千（せん）計（けい）の土（ど）兵（へい）と授（ま）け、這（こ）と遊（ゆう）軍（ぐん）と号（ごう）、三（さん）木（ぼく）ふまゝ、喬（せう）樹（じゆ）
ふまゝ、弱（よ）かゝん方（かた）へ救（きう）應（おう）せよとて、馬（ま）渡（わ）し、控（ひ）さし、行（ぎやう）龍（りゆう）自（みづか）五（ご）千（せん）許（もと）
人（ひと）の土（ど）兵（へい）と卒（そつ）し、三（さん）木（ぼく）の方（かた）へと進（しん）発（はつ）とて、
原（はら）村（むら）本（ほん）陣（ぢん）と居（ゐ）て、三（さん）木（ぼく）の音（ね）信（しん）と聞（き）き、動（う）かす、宇（う）野（の）直（な）川（が）筋（すぢ）と西（にし）へ下（くだ）り、姫（ひめ）路（ぢ）の
方（かた）へと進（しん）む、四（よ）時（じ）の説（せ）話（わ）全（ぜん）時（じ）ふは、これ三（さん）木（ぼく）の戦（いくさ）とて、文（ぶん）建（けん）して、而（しか）して、平（へい）附（ふ）本（ほん）膳（ぜん）ハ土（ど）兵（へい）と卒（そつ）し、喬（せう）樹（じゆ）の縣（けん）裡（り）と討（う）潰（つぶ）し、自（みづか）身（み）真（ま）ま
き、馬（ま）と進（しん）め、門（かど）前（まへ）近（ち）く推（お）寄（よ）つと、唱（な）歌（うた）とて、奉（ほう）らうと、這（こ）時（とき）
しも縣（けん）裡（り）の丹（に）六（ろく）上（じやう）川（が）主（しゆ）殿（でん）佐（さ）実（じつ）、諸（しよ）士（し）と集（あ）て、一（いつ）揆（けい）の大（だい）軍（ぐん）既（すで）

又五傳三

み這所まで推寄られれば手とつりて彼們不制せしむらん。快く討て出日頃の勇氣あり。別所公へ恩と報せん。各々這義と兼知あまると辞と放てられれば諸士這辭不激され大半領諾するといども。尻込するも身入り入り。上川佐實大勇。真先不進んで討て出たり。佐實這日の扮立の身衣の衷甲といひし着下し頭へ鉄の戦冠と戴き手は長き鑑とあり。拿菊水の腰巻と固め前門へぞ討て出たり。佐實毫も疑機する色あり。土冠不向て大音ふ呼りつふやう。汝達賊兵慥不閉べ。吾は喬樹の縣裡におひく。さるものありと知らまき。楠公の後裔あり。上川主殿佐實あり。我と思えぬ奴原の來まや。やうと喚りて。鎗といねつ。突入ハ跡不續て丹羽丸

左衛門長刀振り斬入り。平附本膳とせしむ。土冠と下知して挑み戦ふ。互ふ引く。あまきと踏ひて戦ひし。恐あり。一更あり。一。旗軍と定む。坪蟻平内是と見。味方の負色と見て。これ土兵とす。やう切立。入らざれば戦ふ。這時しも較倉紫宅二郎行竜へ。九斗許人の土兵と卒し。唱喚と発し。鼓譟あり。三木の入口まで責寄り。開時先鋒より報じて云やう。三木勢の先鋒不當つ。一彪の僧あり。皆々七丈の袈裟をかき。さうに合戦とせき休め。悠々として控居たり。この定て深き謀あり。頭領より。御下知あれ。中軍まで立ち入り。と行竜不語り。これ行竜大ふあやし。猛可味方の

又三十一

士卒と止り陣頭まで立出つ向ふときつて見渡すふ其の多少の知を
 ねども先鋒の皆是沙門あり。登時にも獨の沙門班ともあまて
 進み出行竜ふ向て云やう愚僧們恁大勢あり。這所へ出らるる公們
 小對して一点も敵對心有ふあらず。只快く三木殿と勸く公們より
 従ふめんと思ふく這里まで出張せり。貪道の松露寺の任職ふ
 てそが名と瀟山と喚做せり。貪道這首ふ一言あり。心と静めて聽
 ましやう。當時足利の威名衰へ世の稍戦國とありこれども。三木殿
 ふ他候ふ比せむ。上へ天子と武將と尊み。下へ軍民百姓と愚
 らふ。夏最深し。這由へ東播八郡。盜賊の愚少く。國家泰平と
 唱ふ折う。何が故ふ愚民と迷し。舎と壞ち金と屑り。采穀器

財と破碎して加ふ罪あま人命と失くむ。這をもく何の道理ぞ
 昔漢の張角の手下ふ百万の勢あまども。行ふ所幻法也。忽地ふ
 亡びし。和主這理と辨べ速ふ兵と入。万民の害と除よ而も
 上へ武將ふ順ふ。忠信の道と盡し。下へ百姓と按撫して仁政と
 行ふ。禍轉して福とあり。子孫長く栄利と受く功名帛竹ふ
 のるべし。貪道が説所老儒ふして仁ふ迫らるる人と救ふ沙門の
 業あり。必ず疑ふ夏とややく。邪と存く。正ふ附き。國家の泰平と
 思ふるべし。辞と盡して説く。これこれ。這ふ續て象の沙門達異口
 同音ふ辞とくくへ退散とくくを勸らる。行竜怒てややう。こふ存外
 る一言ふ汝が辞理あり。こふあつねむ。其し心又異あり。當時播州

泰平ありども、国君仁ふ疎くして政苛きもの、百姓怨むるはか
 し。譬へ蒲上大學がごとく。皆是桀紂が悪政あり。這より百姓
 們憤々地ふ上と怨者多し。且ふ多して自亂と生じ。某は
 一たび蒲上と討ふ下民期せずして會せ。這道の至りしゆえ。
 然るふ大學忽地亡び。城郭吾手に入られども、百姓多し
 吾と慕ふ。推て盟主とするふ至る。焦るもの、吾三木と伐
 無道と正さんと欲せ。別所殿降参して城とめ。吾ふ獻せを
 是順ふ従ふあり。皇天后土の意ふかひ国家のよ。泰平あり
 べ。早々城と遷とさざやと。いへ、瀧山笑て云や。頭領今蒲上を
 の。吾君候ふ比する夏甚以。其意ふ差へり。蒲上大學へ元よ

りして。女人あり。這より今朝大村時あり。名古小太郎の為ふ討れ
 る。我君焦と聞ふ。大名古が功と賞。却て蒲上と憎む。今
 這その蒲上と吾君候の心の同じか。さる理あり。又百姓の和主
 ふ従ひ。這里まで従ひ来り。帝勢のあ。むる所ありて。
 心服より従ふあり。這理考へ見らる。又説関せ。行竜ハ
 さ。も智勇の者あ。急ふ答ふべき辞あり。愕きて閉口
 する。後、控。淡河彈正。時分は。味方と下知して。不
 意ふ。つと突立。行竜大。愕き。恐。急。味方と下知。つ
 打破らんと。闘。名。淡河彈正。敵と破る。這時あり。つ
 ら。勇。味方と激。毫。疑。機。突。矢と射。丹

鳥銃と打ち。三七二ト一責立られ。さうもらう。土寇の大
 軍。勇氣始て這首ふ挫け。只蜘蛛の子とちうすぐ。四方へ
 とど散乱と。行竜徳と見るより。大に遠て下知すれども元
 より鳥合の集り勢。うれう獨も下知と守るべき己がさあ
 落去て。残り。者へ行竜。属下の小僂羅のあり。是す
 或の落失つ又ハ切まの擣きて。少く見へ。這時まで
 も上川主殿佐実ハ坪蟻平内と戦ひ。土寇の兵大ハ乱。方
 散乱。閉より平内大ハおらう。恐を周章て。逃
 とする所と。上川するさず付入。只一刀切殺。是と見。平附
 本膳开。土寇們一名も支るものもあ。こもま。四方へ散乱

て。一名も戦ふ者あられ。這里ハ追詰那里ハ責詰。生捕高名。知
 ず。群く。丹二万許人の一揆原。一人もせ。逃去。這里や那里ハ打
 聚。又隧と直と。聞駱と。冷河彈正米配打。諸軍と激。打
 唱。嗽天地。響き。さ。か。縛。も。あ。

第廿八回 一陣破。土寇總敗軍也

土寇の頭領。較倉紫。二即行竜。思ひ。かけ。あ。三木方。あ。冷河彈
 正。謀。ふ。當り。味方。大。敗。北。して。平附。本膳。坪蟻。平内。の。両名。も。
 上川。為。討。を。ふ。られ。豹。然。と。大。怒。り。馬。と。小。高。き。阜。り
 の。あ。み。味。方。と。激。して。さ。か。思。へ。も。元。來。鳥。合。の
 集。り。勢。行。竜。が。下。知。と。聽。も。の。あ。乱。を。駱。て。逃。失。つ。今。ハ。帝。其。身

下ふありきれば。天と仰で嘆息し。獨債思ふや。今もろろも敵方
 の謀ふ當り。土兵悉く逃去しければ。這里ふ最もや留りか。再
 蜜原村ふ引退き。巽が勢と一手ふあり。再奉して三木と伐。今日
 の恥辱とす。ぐみ足ま。噫。恚ありと思案。四方ときつと見
 廻らふ。三木の兵數千許名。旗とす。唱嗽とつ。童一名の行
 竜と。鉄桶のどく。拿圍とて。逃るべも見へ。ろろ。行龍呵々と
 打。ひ。你達幾百万。ろろ。拿圍。某。毫も恐るべきや。今
 宵既ふ計。度ふ當り。恚大敗。及び。あま。ろろ。這伏止べきや。
 迎き。再大奉。今宵の恥辱と雪。べ。思ひ。知。や。罵し
 ぶ。刀と口。引。ろ。掌と。睨。て。咒。と。施。猛。可。ろ。風起り。

一天忽地闇夜とあり。行竜へ人馬諸侶虚空へ飄。ど。飛。の。り。形。見
 へ。と。あり。ろ。ろ。淡河彈正下知。して。云。ろ。那。行龍。へ。目。め。ろ。
 神出鬼没の幻術あり。這と挫。計較あれども。今日。緋。の。急。あり
 ぬ。と。用。ろ。ろ。間。あ。れ。且。へ。見。道。ろ。那。必。と。止。走。巽
 女們と一手ふ成。べ。早く追。詰。破。ら。守。べ。又。ろ。ろ。大。勢。ふ。及。べ。
 と。諸軍勢と引。率。大。村。峠。へ。と。発。向。せ。ろ。案。某。下。休。題。這
 首。ふ。ま。這。日。大。村。峠。の。嶺。ふ。隊。と。立。て。控。居。ろ。ろ。擾。並。仲。之。進
 名。古。小。太。郎。兩。名。へ。土。寇。の。兵。の。今。や。來。ろ。故。と。待。ろ。巽。が。手。勢。の
 壑。原。村。ふ。陣。と。居。て。日。暮。ろ。れ。も。ろ。ろ。動。も。小。太。郎。擾。並。ふ。向。て。云
 ろ。賊。兵。早。く。這。所。へ。來。ら。ろ。ろ。石。壁。の。方。より。三。木。へ。向。ろ。行。竜。が。勢。の

音信と待て居るごとと積せらる。志うじ這方より打て下り賊の胆と挫く人擾並主の所存へつらつと問バ仲之進點頭て吾積茶も同じれども賊の蜜原村に陣と居て曾て動ざらへ吾們が這里に在るあり。今這方より討て出あば賊のうけ索ふ階が下り。帝這所と堅く守り動ざらふ如くして。首言早馬と遣して二木のやうさと問ひむらふ暫ありて那早馬。二さんふ入り來つ言止てややう。三木へ向らるる土寇の大軍。淡河彈正主が計ふ當り悉く散乱し。大將較倉行竜も雲と起して逃失く。是ふよつと彈正ぬし。諸軍勢と引卒し少時這所へ來らるべしと汗と流しと迷くれば擾並仲之進急と問より時を來まら。這勢かふ

乗し一息ふ寮原村の賊と打破り初戦の耻と雪ぐべしと踊り上つ下知すれば小大郎も大ふり。一番ふ馬と駈出せぬ跡に續て仲之進开也の大勢雲霞のどく大山の崩るるがごとく。一舟山と駈下り寮原村に控くる賊の隊に討入る。されども異の毫も騒ぐず土寇の兵と二隊に分喚ふおめひく聞ゆる。這方小龍の勢あま。那方小虎の勇あり。追つて入らるる鳥銃と打つ。竹箭と射うけ互に引くと戦ひくすま。かきつ。絆あり。悠る所へ三木ふ。於て追散されらる土寇の敗兵山と越峯とのやうて追ふ。逃入り那地での敗れくと這里那里よく語り。されば異う手勢。是は茂閑より。猛可小臆病神の付陣中色めき立らる。さればつらふ。なれ

又三傳三 卷之四

仲之進味方と激し打立まは土冠の兵大に乱れ散々成て敗れ
を異の急と見まはるも米配うつ下知されども一名も下知
と用ゆる者あらずとみくして逃るる異女の大ふりつ時
奴原が動情を師の急とみくれば大長刀と打うつ一騎
馬と踊せ雲霞のどく群りたる三木勢の真中へ回もろく斬入
るは是と見て三木勢の中より勇雄の若者ども女の敵を道す
あは八方より拿囲切先と並て切く鬼と異女の緯ともせず右ふ
拂いたふ雄立殊死とありて戦へ若者侶その武勇ふ恐む四方
へふりつと逃るる急とみくれば三木勢のやが上ふりつあり
ていづく大軍とありつる異女心ふ思ふや行竜王も三木ふ

て破れ吾済も急る敗戦とありてい今さう云ふ甲斐ありあつて
一回這里と脱れ重て思案とありつると思ひふれば馬上につ
立掌と結んぞ呪と施し忽然と雲ふ乗形ハ消て失ふる
淡河彈正大ふりつる二名頭領既破れ跡と聞し脱れれば
開いたの奴原幾万人ありつるも及恐るる敵あり這勢ふ
乗じつ雄立ふ残り一隊の賊と一まらり追まされ味方の
士卒と激して直ふ雄立へ推寄るる這時も餘江の雄立の縣
裡と打破らんと四方と囲ん責立まは郭中の構きびく夜
ふ至まは責下まは夏あはる守四方と守つ居るる
賊兵追々走りきく行竜王も異王も敵方の謀較ふ當り忽地大

敗ふ及んごう。三木の討兵ハ最大軍あり。少刻這地へ責來るべしと告ぐる。これハ鯨江より。寄集り。土冠の大勢。這告と聽より。大み恐ま。早拔る。落行者十が七八。及ひくる。悠り。かじり。南の方より。三木殿の大軍數千の炬松燈。つれ唱噉と発。三七二十一人。責來ま。二三百人の。ころころ。土冠の奴原。大み恐ま。早散る。逃去て。獨もゆ。ずあり。これハ鯨江。大み恐ま。悠々ハ難義。み及んごう。這里。ふる。長居。又生捕。みせ。三十六計。走る。不如。と思ひ。ふ。これハ只一名。何地とも。か。逃。行。彈正。定範。大み笑ひ。悠あ。ん。と思ひ。ふ。拿。み。足ら。ざる。土冠。們。あ。て。八方へ。駈兵。と遣。猶。逃。の。ころ。逆徒。あ。る。擒來。きて。命。

と傳へ。直。土冠。退散。の。よし。と。別。所。度。へ。言。上。し。這。上。の。ま。ご。音。信。か。ま。の。姫。路。へ。向。ひ。一。手。あ。ま。ご。も。這。と。て。恐。ろ。う。ま。み。あ。る。と。其。身。ハ。數。千。の。軍。勢。と。引。率。し。大。村。峠。ハ。陣。と。拿。て。殘。黨。も。あ。る。と。う。こ。ま。び。く。四。方。と。探。せ。る。登。時。榎。並。仲。之。進。淡。河。彈。正。向。て。云。や。賊。兵。既。ハ。退。散。し。これ。ど。心。元。あ。る。ハ。天。神。山。の。城。あり。積。み。賊。主。行。龍。翼。們。必。す。天。神。山。の。城。壘。に。據。べ。討。陣。の。兵。遲。ま。る。賊。們。要。害。み。と。固。く。守。り。柵。と。強。く。埋。と。深。く。せ。ば。急。に。落。城。い。ま。ま。早。く。討。兵。と。天。神。山。に。差。向。け。登。整。あ。る。と。討。べ。し。い。ふ。ころ。これ。ハ。淡。河。彈。正。打。驚。きて。や。や。某。乙。緯。の。身。ま。い。る。その。一。事。と。亡。却。せ。り。早。く。天。神。山。の。城。壘。と。責。取。べ。し。と。猛。可。ハ。陣。徇。と。諸。

軍と発し、天神山へと発向す。這首ふ且、鯨江、瀧九郎ハ幸やと一方
 と斬抜、山越の細途傳ひ、天神山の方へ逃行し、この内、思ふ
 かり。そも二名の頭領行竜、巽主ハ何國へ影と匿し、まひしや。さる
 この音信と聞ず、それふつとて一方あつて心ふく、宇、雄が更へ
 味方、慈まで敗れ、くして皆ちり、く、行空の定く、定め、く、か
 只人の真敗あり、昔漢の高祖七十余度の戦ひ、一回も克、更あり
 一、埃下の二戦、ふ、頂羽、ふ、克て、終、天下と定め、る、吾、今、慈、敗れ
 くれども、又、真、ぶ、き、時、の、や、あ、ん、脱、ま、て、見、人、と、足、り
 慈して走る所、ふ、忽ち、跡、べ、の方、よ、一、陸、の、騾、兵、十、余、名、銘、ふ、小、具
 足、き、い、く、著、下、し、飛、ぶ、ぐ、く、追、り、來、つ、む、り、く、と、四、方、分、り、

瀧九郎と拿、困、く、鯨江、大、打、愕、き、山、の、内、へ、逃、入、ん、と、す、る、と、の、が、さ
 い、もの、と、一、名、の、騾、兵、角、鉄、打、り、向、ふ、つ、た、お、よ、逆、賊、鯨江、し、や、し、ん、
 這首、ふ、及、ん、ぐ、脱、ま、さ、る、や、快、く、索、と、懸、を、覺、悟、せ、ま、や、と、誥、寄、を
 ば、开、它、の、騾、兵、們、牽、繩、ひ、い、く、の、が、さ、く、や、し、ん、と、誥、う、け、く、鯨江、今、の
 是、ま、ど、あ、り、し、思、ひ、ふ、た、れ、ば、毫、も、恐、れ、も、大、音、ふ、呼、ぶ、り、の、さ、ん、人、你
 達、が、積、量、ち、り、く、を、守、吾、ハ、鯨江、瀧九郎、と、て、即、一、方、の、旗、大、將、あり、然
 せ、ども、運、命、盡、て、更、の、這、首、ふ、及、ん、ぐ、地、獄、へ、の、路、連、々、一、々、首、と
 落、し、て、呉、ん、と、刀、と、抜、て、討、て、蒐、ま、り、騾、兵、も、角、鉄、打、り、切、れ、と
 ら、ひ、打、つ、り、て、歎、味、方、飛、ち、り、く、戦、あ、り、と、れ、ども、騾、兵、ハ、大
 勢、あ、く、瀧九郎、い、く、く、克、得、べ、き、尤、の、肩、と、丁、と、打、を、思、を、守、後

へ兵と二足三足もすきる所と心得らるゝと懸兵の頭人のや
 りつゝ打すゞくやうく地上に引らるゝ。押へく索をさうけ
 る。焦るやへ何處にもあゝ。獨の賊將頭を出らるゝ且見まが
 あか扮立ど。身小緋緘の衷甲と透間もあゝ着下りつゝ白き駒
 小跨りらるゝ。甲と脱で首ふけ。手小一筋の鐘とさげらるゝ年
 最若らして面色玉と欺く。月代の跡長くのひて驟然と
 て額と覆ひ威風堂々形姿壯麗是即別人あゝと。較倉紫雲二
 郎行竜あり。忽地鎗を閃。鯨江と引立らるゝ。懸兵とあゝ突
 伏つ猶もすゝんで開の懸兵と。五人らゝり突らるゝせ。開
 者侶大恐ま。濡九郎と弄あきて踏と求て逃んとするも

向ふ獨りの女賊忽然とて頭を出らるゝ。こもまゝと年まど若
 して身小紅の衷甲とて手小一振の大長劍と提らるゝ。黒き駒
 小跨りて面小白玉と磨がらるゝ。形風妝々として貌姿艶々。是即ち
 別人あゝず。行龍が妻異あり。持らるゝ長劍。或は長。霏。懸兵侶
 小討て菟まへ皆々大狼狽愕き。踏と求て逃んとするも。飛菟
 らるゝ早速の勲き。忽地五六名の懸兵と瞬内に斬伏らるゝ。鯨江濡
 九郎大よろこび。縛の索引解。二名が前小腰と扱て。よろこ
 ひの禮とを述べ。登時異に行竜。打向ひ。今宵はもうす。二本
 方の謀較ふ當りて。焦ゆらるゝ。敗北せらるゝ。悲しむれ。い
 時も早く。天神山。引取。那城。守り。敵兵何十萬と

來るも、さうも、忍る、夏あり、いへば行竜點頭て、吾も、悠思
 一時も早く天神山へ引取人として、這里まで來り、さうも、さうも、
 出合及濡九郎と援、さうも、是天命の盡さる、さうも、さうも、
 かつ、宇雜が夏あり、是の、案、さうも、さうも、さうも、
 日、開義の吾、濟、さうも、さうも、最心か、さうも、思ひ、さうも、
 せ、さうも、地、使者と遣、さうも、那里の在、緯、と聞、さうも、
 路の勢、壯、人、さうも、て、村里と掠、て進、さうも、さうも、
 加古川、近、さうも、さうも、さうも、姫府、さうも、の討、兵、來、り、今、の戦、ひ、最、中
 勝負、さうも、さうも、分、ち、が、さうも、さうも、使者、の、者、の、さうも、さうも、不、題、未、さうも
 使者、來、ら、ず、勝、敗、い、さうも、と、案、さうも、さうも、宇、雜、女、の、當、二、騎、馬、と

飛、さうも、さうも、さうも、那、地、の、戦、悠、々、あり、し、遺、も、さうも、さうも、譚、り、さうも、さうも、
 も、ま、さうも、味、さうも、この、敗、北、あり、と、互、さうも、遺、感、と、談、り、つ、て、打、つ、さうも、さうも、
 さうも、さうも、さうも、途、中、さうも、さうも、その、行、衛、と、見、失、さうも、さうも、さうも、
 行、竜、い、さうも、さうも、さうも、さうも、さうも、安、め、さうも、さうも、折、さうも、さうも、
 さうも、さうも、一人、の、落、武、者、の、さうも、さうも、來、る、年、齡、二、十、四、五、あり、女、の、身、
 さうも、さうも、さうも、着、下、さうも、さうも、征、箭、と、二、筋、三、筋、さうも、さうも、肩、先、さうも、
 當、ら、さうも、さうも、つ、刀、と、杖、さうも、さうも、喘、ぎ、さうも、さうも、息、と、切、さうも、さうも、の、さうも、來、る、是、即、別、人、か
 ら、さうも、さうも、江、が、妻、宇、雜、あり、二、人、と、悠、と、見、さうも、さうも、さうも、且、驚、且、喜、ひ、や
 よ、宇、雜、さうも、さうも、さうも、さうも、さうも、さうも、さうも、宇、雜、の、大、お、さうも、さうも、さうも、
 とも、安、泰、あり、や、い、さうも、さうも、さうも、さうも、今、宵、古、濟、が、敗、軍、の、一、方、か

らぬ這身の誤りしつゝして這罪と賞賚ひ侍らん兩頭領と
行竜額と撫今宵味方の敗軍せしむ汝達より這行竜額大
ある誤りあり吾獨り破すべし又汝達も敗るべきまじき
自卑下すべきや何れもあまき這所ありと長居して天神
山と敵ふ拿まれば後悔そふなきと加へしと諸侶も急ぐん
嚮ふ野兵の頭人が乗來りし馬あれば侍僮ありと宇羅と
助けまづ那馬に乗し去りし馬あれば侍僮ありと宇羅と
つて天神山へと急ぎし宇羅女へ行龍み打向てややる吾濟が加吉
川あり敗る譚話の異主ありしれども君のいまと聽へあげず
路すがり語り侍らん今朝も君の下知と受二千許名の士を

從へ西川傳ひ小村々と乱妨して富家と壞ち大舎と焼き勢ひの
進むむと敵對者一名もあらず軍勢まじく附従ひ一万さうふ
びしこの這首ふ及んと思ふや大勢ふ及むれば一手ふありて進
より隊と分つて發向せし勢ひ抵角と張ふ似く成切速ある
思ひふれば副將ある小貝瀬話四郎と阿足厚太の兩名と一方の大將と
定め五千許人の土兵と与て北の道より進ませし這寺も勢強
て利刀の竹と割ぐて家賊と掠てすしと這寺家町と喚を
しつゝ一軒の富家ありしと名と迷惑屋津良八と云り這者の妻は今茲二
十三四あり元是浪花の育ちて艶顔美麗の者ありし其日の夫ある
津良八と侶ふ家と逃し近村あり一族の方へ匿まんと思ひしあや那女

又三十一卷

轎子の津良八の轎小付漆細道よりつとて所と端をく小貝瀬話四郎
が裏より進み出合へり小貝瀬話四郎と見えり土兵小下知
て那轎と打碎けと下知れば轎夫ども大忍ま轎と道小打碎て
おろし四途路おろして逃去りければ津良八も大忍ま大切ある女房
あまごも其身の命を改らまると是も轎と弄かきてこけつま
ろびつ逃去り其時那轎より一名の美女とて叫び踏のかたり
へ轉び出り畢竟是よりある物語あると宇野雄女も世
く鞠で第五之卷并九回のおどろお説出まへ

舟高の
御書

新話 通世 雲明間雙玉傳第三輯卷之四 終

